様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｋ１２９６２

研究課題名（和文）高密度デジタルデバイスを用いた＜ひと＞焦点化フィールドワーク手法の開拓

研究課題名（英文）Development new field work method using high density digital device : Focusing "person"and his/her way of life.

研究代表者
内藤　順子（NAITO, Junko）

早稲田大学・理工学術院・准教授

研究者番号：５０５６７２９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本科研は「聞く」（<ひと>焦点化）と「見る」（写真観察法）の有機的組み合わせによる新たなフィールドワーク手法の開拓を目指す試みとなった。
<ひと>焦点化とは「ひとをとおすことにより「暮らしのなかの技」や、そこの気風や流儀といった地域が浮かび上がってくる」ようなフィールドワーク手法である。そこに、写真観察法すなわち最新ツールを用いた観察により、視覚の言語化と問題発見を図るフィールドワーク手法を融合させたのである。共同研究やシンポジウムにおける討議を重ねる中で、上記の方法化を模索しつつ、分野や知識レベルを問わず、フィールドワーク初学者にもわかりやすく提供できる教育実践を試み、一定の成果を収めた。

研究成果の概要（英文）：It was an attempt to explore a new field work method by "organic" combination of "listening" (<person> focusing) and "seeing" (photograph observing method).
While conducting joint research and discussions at this reserch, we tried to educate practitioners who can provide easy-to-understand explanations to field work beginner of the field and knowledge level, while seeking the above-mentioned methodology, and achieved certain results.

研究分野：文化人類学

キーワード：フィールドワーク　ひと焦点化手法　写真観察法　フィールドワーク教育

１．研究開始当初の背景

文化人類学をはじめとするフィールド科学の基本的な手ほどきとしてフィールドワークの技法を体系的に伝えていく方法の重要性は、近年とりわけ注目されている。具体的には、映像人類学的方法をフィールドに持ち込むためのさまざまな考案がなされているほか、とりわけ注目すべきなのは、日本文化人類学会編集の『フィールドワーカーズ・ハンドブック』（世界思想社、2011 年）における写真観察法の紹介である。本科研代表者内藤および分担者川田はこれまで、大学学部のフィールドワーク教育において、この写真観察法をもちいた実践をおこなってきたが、各章の独立性が高い本書では、その融合的展開に限界を感じていた。

また調査対象たるフィールドにおけるインフォーマントに接近するいわゆる〈ひと〉焦点化の方法は、社会学的ライフストーリー研究などでは蓄積があるが、文化人類学・民俗学の領域における近年の動向として、『福の民』（福岡市、2010 年）は特筆に値する。個人に極限までせまってマチでの暮らしぶりの語りを重ねていくことによって、そのマチ全体が浮かび上がる手法は、〈ひと〉焦点化フィールドワークとここで呼ぶものの原型である。以上のような背景をふまえ、本研究では以下の三点を到達点としてかかげた。

（１）研究方法の開拓：AV 資料収集に用いる高密度デジタルデバイスを使用しながら、〈ひと〉に極限まで接近して焦点化させる個人への聞き書きを融合させる手法を開拓する。

（２）フィールドワーク教育への援用：上記に連動して、高密度デジタルデバイスをもちいて収集されるフィールドデータを適正に編集・集積する技術をフィールドワーク技法として定着させ、初期段階のフィールドワーク教育において実践的に援用し、研究と教育をリンクさせる。

（３）研究資料蓄積：写真観察法、ならびに〈ひと〉焦点化聞き書き法をもちいた実際の先行研究成果が生成された過程そのものを当事者へのインタビューなどにより記録化し、共有資源たりうるような情報提供をおこなう。

２．研究の目的

「高密度デジタルデバイスを用いた〈ひと〉焦点化フィールドワーク手法の開拓」

本研究の目的は、近年急速に普及した高密度デジタルデバイスを適正に使用しながら、たんに技術的側面にたよるだけではなく、マチを生きる〈ひと〉を焦点化させうるフィールドワークの手法を開拓することである。フィールドワーク研究における AV 資料の使用や、インフォーマント個々人に焦点をあてた研究はこれまでにもいくつかなされてきた。本研究ではこれらの先行研究の方法論的蓄積を整理しながら、両者を総合的に融合させたユニークな手法を開拓し、大学学部学生などフィールドワーク初学者にもわかりやすく提供できるフィールドワーク教育に資するような具体的・実践的な導入方法を編み出すことをめざす。

３．研究の方法

先述の研究背景の三つの柱にそって実施計画を考案した。

（１）フィールドワーク方法の開拓

（２）フィールドワーク教育への援用

（３）研究資料蓄積

最終的には（１）の開拓が目的であり、そのためには教育現場での実践（２）と、フィールドワーク方法論自体の聞き書き（３）を両面で展開する。したがってその方法は、アクションリサーチの側面（おもに（２）において）と、インタビューと文献資料収集を併用する側面（おもに（３）において）に分かれる。

代表者がこれまでフィールドワークに関しておこなってきた思考ならびに実践は、『アクション別フィールドワーク入門』（「教える」、世界思想社、2008 年）、ならびに『支援のフィールドワーク』（「チリの開発プロジェクトでの偶然の出会い」、世界思想社、2011 年）などにまとめられている。これによって得たのは、①研究の最前線と現場の諸問題を切り結ぶという知見、②フィールドワークというのは個人技芸のように思われがちであるが、実施者ごとに個性を発揮しつつ汎用化させうる職人芸であることなどの知見であった。また分担者は、『エスノグラフィー・ガイドブック』（嵯峨野書院、2003 年）の編集を通じて、さまざまなフィールドワークの成果としてのエスノグラフィーの分類整理をおこない、視覚と聴覚を融合させる方法が有効であるという見通しを得ている。

また教育実践においては、代表者はこれまで「フィールドワーク概論」、「都市人類学」などの科目を担当し、都市観察を画像資料として記録化する実践を行ない、フレームにおさめてはじめ気づく視点の獲得を学生と共有してきた。分担者は前任校において、写真資料から都市祭礼を描いていくプロジェクトを「調査研究法」や「エスノグラフィー論」などの授業で実践しており、写真資料の作成を通してフィールドの現実とかかわっていく手法の有効性を確認している。

これらを応用して、本研究では 2 年計画によって、上記の 3 点の研究内容を実施していくこととした。

４．研究成果

「聞く」（<ひと>焦点化）と「見る」（写真観察法）の有機的組み合わせによる新たなフィールドワーク手法の開拓を目指す試みとなった。

（１）<ひと>焦点化フィールドワーク方法化

<ひと>焦点化手法についてそのアイディアの中心的著作である『福の民』をひもといた。『福の民』にかかわった編著者とりわけ連携研究者の関氏や福岡市史編纂室にそのプロセスと手の内を聞き、2年目（最終年度）には著者3名と編集者1名を登壇者とした学会シンポジウムを開催（2017年1月）して関心と問題を共有することで、ゆたかなフィールドワーク手法であることの確認がとれた。＜ひと＞焦点化フィールドワークとは、たんなる個人史を描くことではなく、そのひとを中心としてあらわれてくる人間関係と社会・街とのかかわり（社交や民俗）をとらえる／にじみでてくるものをとらえる、ことである。「暮らしのなかの技」ともいうべき、ひとや社会に備えられている、あるいは生み出されている知恵である。本研究を通じて、このような、たんなるライフヒストリーに閉じ込めないフィールドワークのありかたの一端を具体をもって示すことができた。しかしながら必ずしも方法化には至っていないのが現状である。だが、それは成果が収められなかったということではない。フィールドワーカーの数だけ手法があるこの領野においては、むしろ積極的成果ともいうべき方法模索プロセスの共有となった。

ひとから描くというこの手法はあたりまえのことではあるが、それがどのような手続きで行われ、現場で体感されることはどのようなことがあるのか、あまり語られてこなかった。だが、つぎに述べる教育に援用することを考えたときに、こうしたフィールドワーカーの実感の伴う知恵と工夫と技の言語化と共有もまた必要であることが明確となり、それを活かす形で教育実践につなげられた点で、本研究の目的はおおむね達成されたと考えている。

（２）研究方法の開拓・教育への援用

参加者は、代表者の勤務校における担当授業「フィールドワーク概論（早稲田大学理工学術院）、ならびに分担者の勤務校における担当授業「文化史実習Ⅲ」（成城大学文芸学部）の受講生によって構成された。初年度は両校合同での授業を実施した。

参加者は『フィールドワーカーズ・ハンドブック』における「写真観察法」の技法を共有できるよう学習し、数人ずつのフィールドワーク・チームを結成。つぎに東京都内の特定地域（初年度は中野・高円寺、最終年度は早稲田大学では中野、成城大学では中野・高円寺および下北沢）を選定し、複数地点において撮影した写真のプレゼンテーションをふまえたディスカッションを実施。第三に、ディスカッションを通してその街の暮らしに接近し、そこで焦点化させる個人をインフォーマントとして選定し、〈ひと〉焦点化インタビューを実施。初年度は、「被写体本人に説明してもらうインタビュー」からアプローチした。（二年目の「被写体を説明できる人物を探してインタビューする」より初歩的で入りやすいアプローチである）。

いずれの年度、大学においても濃密な報告書を作成するに至るフィールドワーク教育となった。

さらに、人類学的フィールドワークの技法を、文化人類学のみに閉じることなく開いた活用を試みた点についても強調しておきたい。ものつくり、開発、建築土木、技術開発など、人の立場に立って考える、現場からの発想の有用性は、人類学のみにとどまらない。本研究はとりわけ、研究と教育のリンクの側面で、理工系学部と文芸系学部の学生への教育実践を通した文理融合の方法論の開拓に寄与した。

（３）高密度デジタルデバイスの利用

当初は高密度デジタルデバイスとして、資料収集（写真観察）だけでなく資料蓄積や分析でもその利用を念頭に置いていたが、実際には写真観察にとどまり、いうなれば「スマホ世代のフィールドワーク」となった。しかしながら、身近な日常のツールが形を変えて問題発見のツールになることを初学者が体験したことは、有意義であったと考えている。つまり、何気ない日常が視点を変えると別のものとして見えてくるという経験につながったからである。

今後、本研究で当初目論んだ高密度デジタルデバイスによる資料蓄積と分析について、たとえば AI の進展などによりまた新たな時代に合わせたフィールドワーク展開を模索することが課題となるであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

内藤順子,「序論・地域社会を創る：人から描く街の民俗誌」『文化人類学研究』16 巻, 査読有, 3-5 頁, 2016 年.

川田牧人,「グローカルな＜生＞を記述することば」, グローカル研究叢書『社会接触のグローカル研究』査読無, 15-30 頁, 2016 年.

川田牧人,「序論：呪術的実践―知の現代的諸相―科学／呪術／宗教／その他の実践―知の併存状況から」査読有, *Contact Zone vol.7*(htpp://hdl.handle_net_2433/198468).

關一敏,「福の民の方法」『文化人類学的研究』16 巻, 査読有, 6-10 頁, 2016 年.

〔学会発表〕（計５件）

川田牧人,「農村モノグラフの意義と課題」, 日本村落研究学会, 2016 年 7 月 23 日.

内藤順子,「ひとから描く民俗誌：新たなフィールドワーク技法にむけて」, 現代民俗学会, 福岡市博物館（福岡県福岡市）, 2017 年

1 月 8 日.

川田牧人,「福の民手法の教育実践」, 現代民俗学会, 福岡市博物館（福岡県福岡市）, 2017 年 1 月 8 日.

關一敏,「宗教書を読むことで何がわかるのか」, 西日本宗教学会第 5 回学術大会, 福岡大学セミナーハウス（福岡県福岡市）,2016 年 3 月 31 日.

川田牧人,「戸惑う呪者：科学と呪術をめぐる信念世界の描き方」, 日本文化人類学会中国・四国地区研究懇談会, 広島県立大学サテライトキャンパスひろしま（広島県広島市）, 2015 年 6 月 20 日.

〔図書〕（計２件）
川田牧人, 明石書店,『フィリピンを知るための 64 章』分担執筆, 総ページ数 399 頁,2016 年.

内藤順子,春風社,「スラム観光をめぐる感情的葛藤のフィールドノート」,『実践と感情』関根久雄編著, 184-206 頁,2015 年.

６．研究組織
(1)研究代表者
内藤　順子（NAITO, Junko）
早稲田大学・理工学術院・准教授
研究者番号：５０５６７２９５

(2)研究分担者
川田　牧人（KAWADA, Makito）
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：３０２６０１１０

(3)連携研究者
關　一敏（SEKI, Kazutoshi）
九州大学・名誉教授
研究者番号：５０１７９３２１